

何のために語り直すのか？： 転換的語り直しの目的に関する言語分析

池 田 和 浩*

The Relationship between strategy of biased retelling and purpose of retelling:
Evidence from Text-mining Analysis.

Kazuhiro IKEDA

本研究では、4種類の感情的な転換的語り直しの方略によって、語りの目的や機能に差異が生じるかを探索的に検証した。243名の参加者は、(1)ネガティブ反復方略、(2)ポジティブ反復方略、(3)ネガティブ変化方略、(4)ポジティブ変化方略の、それぞれについて日常生活の中で具体的に語り直しを行う状況を思い出しながら、思いつく限りの“語りの目的”を記述した。得られたプロトコルはKH Coderを用いたテキストマイニングによって分析された。調査の結果、ネガティブ反復とポジティブ反復では他者志向的な目的が、ポジティブ変化では自己志向的な目的が抽出された。これらの結果について、自伝的記憶の機能に基づく考察が行われた。

Key words ; Biased retelling, Emotion, Purpose of retelling, Text-mining Analysis

他者との会話は、自己と外界とをつなぐために頻繁に使用されるツールの一つであり、我々は人との話し方を状況や目的に応じて取舍選択する。つまり会話とは、人に話を聞かせることが前提となっており語り手の目的に即して行われる行為である。Schank (1990/1996)は、語りの基本的目的を、自己志向的、他者志向的、会話志向的、の3つに分類している。

自己志向的な目的とは、自分自身のための会話であり、話をすることで満足感を得ようとする場合が当てはまる。他者志向的な目的とは、他者のための会話であり、自分が話すことで聞き手に何らかの影響を及ぼすことから満足感を得る場合が当てはまる。これら2種の目的には、他者に特定の情報や意見を伝

えようとする意図が含まれる。また、実際の会話場面では話題提供を目的とした会話や、話題の切り替えを目的とした会話が存在する。そのような、会話のための会話が、会話志向的な目的である。

また、自己志向的な目的は、下位カテゴリとして、カタルシス(感情浄化)、注意喚起、賛同欲求、忠告要望、自己描写、の5つの意図に分類される。他者志向的な目的は、重要事項の表現、感情操作、魅了、情報伝達、重要事項の要約、の5つの意図に分類される。これらの目的は、常に単一の目的で表出されるわけではなく、会話の中で複数の目的が複雑に交錯することも多い。

語りと語り直しの違い：日常の中で語られる出来事は、会話の中で一度しか用いられない話題と、繰り返し用いられる話題とに分けられる。Marsh & Tversky (2004) では、33名の参加者から、4週間の間に語られた出来事が収集された結果、1059項目の報告が得られた(一人あたり17～82項目)。そのうち、繰り返し語り直された出来事は、一人あたり2.7項目の報告が得られた。また、一度だけ語られた出来事に比べ、繰り返して語り直された出来事は、より古くに起きた出来事であり、ネガティブもしくはポジティブな感情を伴う出来事が多く、感情の強度が高いほど何度も語り直されていた。つまり、語り直しが反復される出来事であるほど、強い感情価を伴う比較的古い過去の体験である可能性が高い。このような記憶を、他者に何度も語ることは、どのような効用があるのだろうか。

語り直しの社会的機能：社会的な目的にあわせて個人の体験の記憶を用いることは、自伝的記憶のもっとも基本的な使用方法であると考えられている (Bruce, 1989)。自伝的記憶とは、広義には、個人が人生において経験した出来事の記憶と考えられており (Conway, 1990)、昨日の自分と今日の自分が同一人物であることを認識できるのは自伝的記憶が安定して保存されていることに起因する。

たとえばコミュニケーション場面における自伝的記憶の利用について Pasupathi & Carstensen (2003) は、参加者にポケットベルを1週間携帯させ、一日5回ランダムにベルが鳴ったときに、参加者が活動していた内容を記録させた。その結果、参加者の記録の平均20%が、過去の体験について他者と会話していた。Thorne, McLean, & Lawrence (2004) では、参加者のアイデンティティと密接に結びつくような記憶の88%が、過去、他者に語られていたことを確認している。このように、ある自伝的記憶を繰り返しコミュ

ニケーションに活用することは、対人関係を円滑にすることが目的の一つといえる。

また、他者との関係を想起することは、当事者との対人関係に良い影響を与える。たとえば、相手との楽しい経験を想起することは、年齢に関わらず2者間の関係を強める重要な要素であることが確認されている (Alea & Bluck, 2007)。さらに、親友や家族のような自分自身にとって特別親しい関係にある人の間では、なじみの話を繰り返し想起することが日常的に観察される。ある自伝的エピソードを話題にして繰り返し共有することの意味は、メンバー間のラポールを促すことや集団としての価値観を高めることにあると考えられている (Norrick, 1997)。このほかにも、自伝的記憶を想起することで、他者の感情の類推や理解といったソーシャルスキルの向上に役立つことが指摘されている。たとえば、記憶を詳しく鮮明に想起できる人は、男性ではアサーティブネスが高く、女性では共感性が高いことが見出されている (Pohl, Bender, & Lachmann, 2005)。

Alea & Bluck (2003) では、このような自伝的記憶の社会的機能を3つに大別している。第一に、他者との結びつきの中で、親密性を発展させ維持するための機能である。第二に、ポイントの説明やアドバイスなどによる、他者への指導や情報提供を行うための機能である。第三に、他者からの共感を得ることや、他者に共感するための機能である。なお、社会的な機能を発揮するために自伝的記憶を用いるには、(1) 他者と記憶を共有することと、(2) ただ考えただけの記憶ではない、という2つの制約が存在することが指摘されている。つまり、聞き手が存在する状況において、自己の安定に起因するような比較的重要な出来事を、言語として表出すること、が求められる。

本稿の課題と目的：ここまで、過去の体験の

語り直しが日常生活の中でなぜ頻繁に行われるのか、その目的について概観してきた。しかしながら、先行研究で熟考されてきたことは語り直し全体に関する目的についてであり、語り直しの方向性や方略を考慮した上で、語り直しの目的を調査した研究はこれまでに行われていない。

たとえば、過去に起きた体験を再現するように楽しい体験を肯定的に繰り返し語ることもあれば、過去のつらい体験を肯定的な側面から捉え直すために繰り返し語ることもあるだろう。このような意図的にかたちをかえた語り直しは転換的語り直し (biased retelling) と呼ばれている (Ikeda, 2009; 池田・仁平, 2009, 2013; Tversky & Marsh, 2000)。池田・仁平 (2013) では、感情的にニュートラルな物語について、“楽しかったこと”として語り直す条件、物語の内容を“辛かったこと”として語り直す条件、統制群として物語をそのまま正確に繰り返し語る条件、の3条件で語り直しの特性を検証し、語りに沿った記憶の変容を確認している。このような、出来事の感情価に焦点を当てた語り直し研究の多くから、心理的・身体的な効用が確認されている。しかしながら、聞き手の存在する語り直しには、目的に即した方略が存在する。たとえば、カウンセリングのような臨床場面においては、ネガティブな事実をネガティブに語り直すことが、語りの目的に沿った方略であると考えられる。また、友人同士の日常会話のような対人関係の維持・形成においてはポジティブな事実をポジティブに語り直すことが目的に沿った活用であると考えられる。しかしながら、多くの語り直しの方略がどのような状況において効果的に活用されているのかについては、いまだ明らかにされていない。

そこで本稿では、(1) 否定的な過去の出来事を否定的なままに繰り返し語り直す方略、(2) 肯定的な過去の出来事を肯定的な事実として繰り返し語り直す方略、(3) 否

定的な過去の出来事をポジティブな側面から語り直す方略、(4) 肯定的な過去の出来事をネガティブな側面から語り直す方略の、合計4方略について、語り直しの目的に特徴的な差異が生じるかどうかを探索的に検証することを目的とした。

方法

参加者 大学生243名 (男性42名、女性201名) が調査に参加した。参加者は、大学1年次の学生176名、2年次の学生55名、4年次の学生11名、大学院生1名であった。

手続き 心理学の講座に参加した参加者に対して、自由記述形式による回答を求めた。なお本調査は、自由参加によって行われた。参加者は、次の文章を熟読し、実験目的に同意した参加者のみが、自由記述を行った。

私たちは、過去に体験した様々な出来事を、繰り返し、繰り返し、語ります。本調査は、そのような“繰り返し語り直される出来事”が、「どのような目的で」語られるのかを調べるものです。語り直しの目的とは、たとえば、「楽しむため」、「楽しませるため」、「共感を得るため」などです。他にもたくさんの目的が考えられます。そこで、皆さんが日常生活の中で具体的に語り直しを行う状況を思い出しながら、下記の4つの語り直しのタイプに応じて、思いつく限り、語りの目的をご記入ください。タイプごとに共通する目的があってもかまいません。

続いて参加者は、(1) 過去に起きたポジティブな出来事をポジティブに何度も繰り返し語る目的 (以下、ポジティブ反復と表記)、(2) 過去に起きたポジティブな出来事をネガティブに何度も繰り返し語る目的 (以下、ネガティブ変化と表記)、(3) 過去に起きたネガティブな出来事をネガティブに何度も繰り返し語る目的 (以下、ネガティブ反復と表

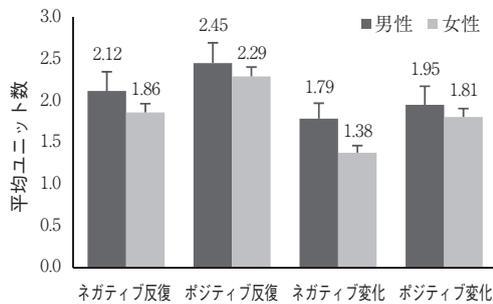


Figure 1. 語り直し方略ごとの平均ユニット数

記)、(4) 過去に起きたネガティブな出来事をポジティブに何度も繰り返し語る目的(以下、ポジティブ変化と表記)、の4つの目的についてそれぞれ回答した。

結果

基本ユニットのコーディング：テキスト分析を行う前に、記述されたプロトコルをユニットとしてコーディングした。ここでは、一つの目的を1ユニットとした。一つの方略に対して複数の記述が行われた場合、ユニットの分割は、文字数の多寡に関わらず、個別の目的として分割できるものを1ユニットと分類した。ユニットのコーディングが終了した後、語り直しの方略別にユニットの総数および参加者一人当たりの平均ユニット数を算出した。全方略を通して、参加者は平均7.5ユニットの語りの目的を記述した(レンジ：1-31)。各方略においてユニット生成に差異が生じるかを確認するため、ユニット平均数について、方略(4：ネガティブ反復・ポジティブ反復・ポジティブ変化・ネガティブ変化)×性別(2：男性・女性)の2要因分散分析を行った(Figure 1)。分析の結果、方略の有意な主効果が確認された($F(3, 723) = 21.37, p < .001$)。性別の主効果および方略×性別の交互作用は確認されなかった(男性平均2.08ユニット($SD = 0.19$)、女性平均1.84ユニット($SD = 0.88$))。

Table 1. 頻出語上位150語(数値は度数)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	443	場	23	表現	11
ポジティブ	192	反省	23	勉強	11
出来事	173	持つ	21	友人	11
相手	162	自己	21	期待	10
ネガティブ	161	誰か	21	見る	10
共感	115	気分	20	行く	10
思う	115	起きる	20	思える	10
話す	112	起こる	20	自虐	10
自慢	90	経験	20	笑い	10
楽しい	87	嬉しい	19	上	10
過去	85	気	19	前	10
人	81	成功	19	認める	10
楽しむ	79	友達	19	理解	10
気持ち	77	一緒	18	やる気	9
語る	76	言い聞かせ	18	安心	9
忘れる	72	自信	18	暗い	9
良い	69	心	18	一つ	9
失敗	55	他	18	印象	9
得る	53	褒める	18	喜ぶ	9
今	52	見せる	17	今後	9
目的	52	次	17	弱い	9
考える	46	状況	17	乗る	9
思い出す	46	昔	17	場合	9
伝える	46	満足	17	辛い	9
笑う	44	テスト	16	内容	9
同情	43	ネタ	16	不安	9
慰める	40	感じる	16	本当	9
知る	40	記憶	16	目指す	9
嫌	39	周囲	16	いつ	8
言う	39	幸せ	15	アドバイス	8
話	38	盛り上げる	15	テンション	8
元気	35	体験	15	栄光	8
聞く	35	浸る	14	教訓	8
繰り返す	34	大丈夫	14	軽い	8
周り	33	会話	13	言葉	8
笑い話	33	頑張る	13	高い	8
励ます	31	思い込む	13	思考	8
悪い	30	出す	13	成長	8
明るい	30	人間	13	相談	8
前向き	29	分かる	13	恥ずかしい	8
心配	27	楽	12	二度と	8
他人	27	結果	12	不幸	8
思い出	26	思い	12	もう一度	7
変える	26	他者	12	違う	7
落ち込む	26	悲しい	12	引く	7
自身	24	本当に	12	過ち	7
付ける	24	だめ	11	感情	7
面白い	24	強い	11	気づく	7
アピール	23	行動	11	現在	7
共有	23	少し	11	現実	7

方略の主効果について多重比較検定を行った結果、ポジティブ反復方略は、その他の方略に比べ、ユニット数の生成が有意に多かった($ps < .01$)。また、ネガティブ変化方略は、すべての方略に比べ、ユニット数の生成が有意に少なかった($ps < .05$)。

頻出語：プロトコルデータについて、KH Coderを用いたテキストマイニング分析を行った(樋口, 2004)。はじめに、全テキストに含まれる最頻出語を上位から150語抽出した(Table 1)。

Table 2. 語り直しの方略ごとの頻出語上位 10 語 (数値は度数)

ネガティブ反復		ポジティブ反復		ネガティブ変化		ポジティブ変化	
自分	94	自分	151	自分	95	自分	103
共感	58	楽しい	58	相手	38	思う	42
同情	36	相手	56	思う	34	相手	35
慰める	33	楽しむ	54	自慢	30	話す	34
相手	33	自慢	53	良い	23	過去	33
話す	26	話す	34	今	22	失敗	28
忘れる	24	共感	31	過去	20	笑う	25
励ます	22	思い出す	31	語る	20	気持ち	24
失敗	20	人	31	共感	19	笑い話	24

Table 3. 語り直しの方略ごとの特徴語の抽出結果 (数値は Jaccard 類似性係数)

ネガティブ反復		ポジティブ反復		ネガティブ変化		ポジティブ変化	
共感	.107	自分	.169	自分	.127	思う	.075
同情	.074	楽しい	.092	相手	.074	過去	.062
慰める	.068	自慢	.086	思う	.072	話す	.060
話す	.047	楽しむ	.084	自慢	.066	失敗	.057
励ます	.045	相手	.082	今	.056	笑い話	.051
忘れる	.042	思い出す	.052	良い	.052	笑う	.048
得る	.037	気持ち	.045	語る	.045	前向き	.047
失敗	.037	人	.045	過去	.044	気持ち	.047
繰り返す	.032	忘れる	.038	言う	.039	変える	.045
聞く	.032	良い	.034	伝える	.030	考える	.043

Table 4. 語り直しの方略および性別ごとの特徴語の抽出結果 (数値は Jaccard 類似性係数)

ネガティブ反復 - 男性		ネガティブ反復 - 女性		ポジティブ反復 - 男性		ポジティブ反復 - 女性	
同情	.071	共感	.112	自慢	.066	自分	.151
慰める	.056	同情	.067	自分	.055	楽しい	.094
心配	.044	慰める	.065	体験	.053	楽しむ	.087
聞く	.041	励ます	.051	相手	.052	自慢	.079
忘れる	.039	失敗	.045	楽しい	.044	相手	.073
相手	.037	話す	.045	楽しむ	.041	思い出す	.055
共感	.035	人	.043	話す	.040	人	.046
楽	.030	繰り返す	.037	伝える	.034	忘れる	.044
得る	.029	忘れる	.036	自信	.034	気持ち	.044
起こる	.028	得る	.036	自身	.032	良い	.035
ネガティブ変化 - 男性		ネガティブ変化 - 女性		ポジティブ変化 - 男性		ポジティブ変化 - 女性	
自分	.053	思う	.076	心配	.056	思う	.085
伝える	.050	今	.066	考える	.048	失敗	.067
自慢	.050	良い	.064	相手	.042	過去	.065
相手	.048	相手	.059	自分	.041	話す	.062
高い	.048	自慢	.057	自信	.040	笑う	.053
謙虚	.037	語る	.047	前向き	.036	笑い話	.051
成功	.032	言う	.042	笑い話	.035	変える	.047
過去	.032	過去	.040	勇気	.033	前向き	.047
話す	.028	満足	.031	ネタ	.030	気持ち	.046
話	.027	悪い	.030	変える	.027	忘れる	.045

分析の結果、プロトコルの中で最も出現した回数が多かったものは、「自分」であった。次いで出現回数が100回を超えた単語として、「ポジティブ」「出来事」「相手」「ネガティブ」「共感」「思う」「話す」が抽出された。このうち、「ポジティブ・ネガティブ・出来事」は、いずれも出現回数が150を超える単語ではあるが、調査用紙の指示語に含まれており、参加者の筆記はその影響を大きく受けたと予測される（参加者の61.7%が単語

を使用したことになる）。そのため、以下の分析からは除外した。同様に、「共感」も出現回数は100回を超えていたが、使用頻度が全体の50%を下回っていたため、以下の分析において使用した。

続いて、語り直しの方略別に頻出語を抽出した（Table 2）。その結果、各方略において若干の違いは認められるものの、使用語彙の特徴は不透明なままであった。そこで、各方略で使用された語彙のうち、それぞれの方略

他、共感、自信、しあわせ感、雰囲気作り、嬉しさ、元気付け、前向きな思考、といった小グループの共起が形成された。

対応分析：続いて、語り直しの方略ごとに、特徴的な語彙の使用が認められるかを検討するため、頻出語上位93単語について対応分析を行った（Figure 3）。対応分析では、出現パターンに特徴のない単語は、原点付近にプロットされる。また、原点から見て各方略の位置にプロットされる語彙は、プロット独自の単語であると推定される。加えて、原点から離れるほどに各方略を特徴付ける語彙であると解釈することができる（樋口, 2013）。

分析の結果、ネガティブ変化方略は、他の方略に比べ、使用される語彙に固有の特徴が認められないものの、その語彙特徴は、ポジティブ反復方略に若干類似していることが確認された。ポジティブ反復方略に特徴的であった語彙は、「嬉しい」「浸る」「盛り上げる」「幸せ」といった単語であり、楽しさを共有することを目的とした方略特徴を持つことが確認された。ネガティブ反復方略では、「楽（になりたい）」「同情」「慰め」といった、自己反省を伴う感情の開放が語り直しの

目的となりやすいことが確認された。ポジティブ変化方略では、「前向き」「笑い話」「変える」などのような、未来志向の発想の転換が目的となる傾向が見出された。

次に、性別の影響を確認するため、語り直しの方略を男女別に分類し、同様の手続きで対応分析を行った（Figure 4）。分析の結果、ポジティブ変化方略以外には大きな性差は認められなかった。ポジティブ変化方略については、男性に比べ女性において、未来志向の発想の転換がより特徴的であることが確認された。この傾向は、方略および性別ごとの特徴語の抽出結果においても類似した傾向が認められた（Table 4）。

クラスタ分析：これまでの分析で明らかになった単語間の関連性に基づき、頻出語上位93語について、Word法による階層的クラスタ分析を行った。その結果、併合水準値が1.0を超えたクラスタであること、かつ、プロットラベルの落ち込みを参考にし（Figure 5）、クラスタ数を12で固定し再度分析を実行した（Figure 6）。

分析の結果、クラスタ化された項目についてKWICコンコーダンス機能を使用し、単語の前後の文脈を確認したのち、各クラスタを次の通り命名した；（1）元気付け、（2）共感、（3）過去と現在の対比、（4）受け入れ、（5）盛り上げ、（6）情報共有、（7）

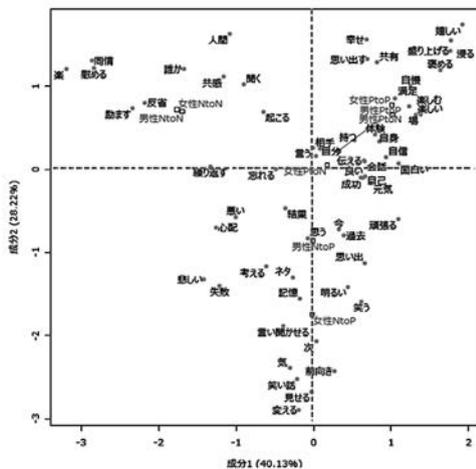


Figure 4. 方略×性別の反応分析結果

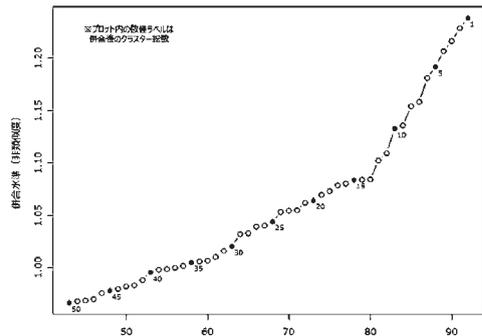


Figure 5. プロットラベル結果

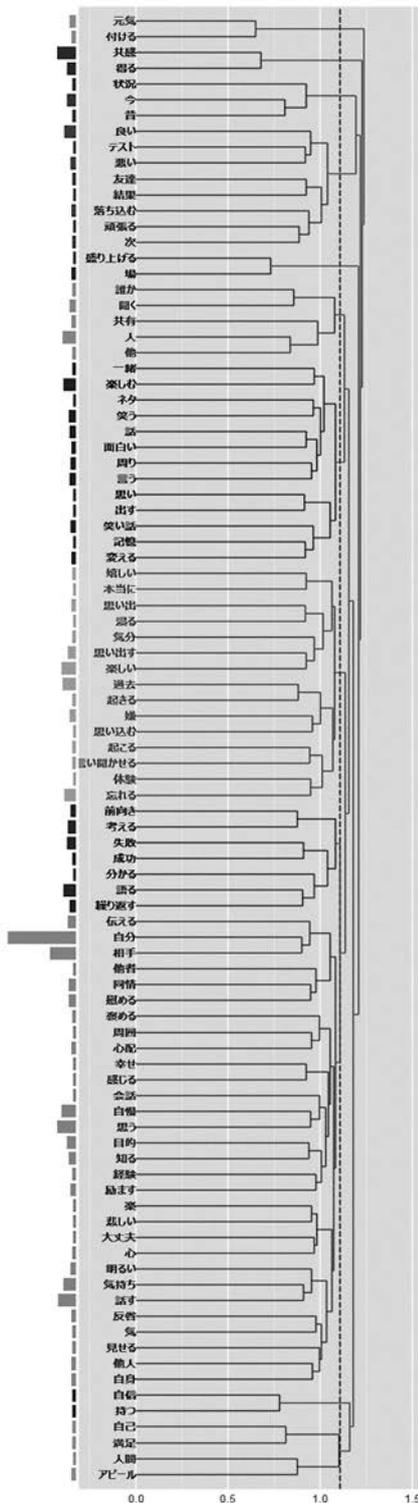


Figure 6. 階層的クラスタ分析結果

笑いの共有、(8) 楽しさ想起、(9) 前向きな思考、(10) 感情共有、(11) 自信、(12) 自己アピール感 (各クラスタ名称は Figure 6 のクラスタを上から表記)。

コーディング・クロス集計：クラスタ分析の結果を踏まえ、各クラスタに含まれる単語を基準としてコーディングルールを作成し、クラスタごとに、語り直しの方略別の出現数をクロス集計により算出した (Table 5)。さらに、方略別に単語の出現数に偏りが生じたかを確認するため、各クラスタの単語出現数について χ^2 検定を行った結果、自己アピール感を除く全てのクラスタにおいて、人数分布に有意な偏りが見られた。

元気付けクラスタについて、ライアンの名義水準を用いた多重比較分析を行った。その結果、ポジティブ反復方略では、ネガティブ反復方略およびネガティブ変化方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。

共感クラスタについて同様の分析を行った結果、ネガティブ反復方略では、他の方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった。また、ポジティブ反復方略では、ポジティブ変化方略に比べ有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。

受け入れクラスタについて同様の分析を行った結果、ポジティブ変化およびネガティブ変化方略では、ネガティブ反復方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .05$)。

盛り上げクラスタについて同様の分析を行った結果、ポジティブ反復方略では、その他の方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。

情報共有クラスタについて同様の分析を行った結果、ポジティブ反復方略では、ネガティブ変化およびポジティブ変化方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった

Table 5. クラスタごとの語り直し方略クロス集計および χ^2 検定結果

Cluster No.	Cluster Code	ネガティブ 反復	ポジティブ 反復	ネガティブ 変化	ポジティブ 変化	χ^2	df	<i>p</i>
1	元気づけ	5	19	4	15	15.3	3	<i>p</i> <.01
2	共感	58	35	22	9	42.3	3	<i>p</i> <.05
3	過去と現在の対比	9	12	23	20	8.13	3	<i>p</i> <.05
4	受け入れ	21	41	40	48	10.7	3	<i>p</i> <.01
5	盛り上げ	0	21	5	4	34.3	3	<i>p</i> <.01
6	情報共有	43	53	22	22	20.7	3	<i>p</i> <.01
7	笑いの共有	39	115	49	98	54.5	3	<i>p</i> <.01
8	楽しさ想起	59	154	57	97	67.4	3	<i>p</i> <.01
9	前向きな思考	50	36	40	86	29.4	3	<i>p</i> <.01
10	感情共有	256	296	184	243	26.3	3	<i>p</i> <.01
11	自信	4	15	4	9	10.3	3	<i>p</i> <.05
12	自己アピール感	13	20	16	13	2.1	3	<i>n.s.</i>

Table 6. サブクラスタごとの語り直し方略クロス集計および χ^2 検定結果

Cluster No.	Cluster Code	ネガティブ 反復	ポジティブ 反復	ネガティブ 変化	ポジティブ 変化	χ^2	df	<i>p</i>
7a	他者志向の笑い	29	103	41	58	54.6	3	<i>p</i> <.01
7b	自己志向の笑い	13	13	10	49	48.6	3	<i>p</i> <.05
8a	肯定的目的の楽しさ想起	14	113	24	30	138.1	3	<i>p</i> <.05
8b	否定的目的の楽しさ想起	48	62	39	78	15.3	3	<i>p</i> <.01
10a	同情を求める共有	161	185	123	129	16.8	3	<i>p</i> <.01
10b	心配の希求・拒絶	14	17	7	19	5.8	3	<i>n.s.</i>
10c	自己注目動機	69	115	73	75	16.7	3	<i>p</i> <.01
10d	開放を求める共有	26	5	4	16	25.3	3	<i>p</i> <.01
10e	切り替え	55	75	43	85	16.8	3	<i>p</i> <.01

た (*ps* <.05)。

笑いの共有クラスタについて同様の分析を行った結果、ポジティブ反復およびポジティブ変化方略では、他の2方略に比べ有意にクラスタ関連語の出現数が多かった (*ps* <.01)。しかしながら、笑い共有のクラスタには、語り直しの目的が他者と笑いを共有するための他者志向的な側面を持つサブクラスタ（「一緒」「楽しむ」「ネタ」「笑う」「話」「面白い」「周り」「言う」と、自分自身で話を楽しむための自己志向的な側面を持つサブクラスタ（「思い」「出す」「笑い話」「記憶」「変える」）の相反するクラスタが存在する（Figure 6）。そこで、サブクラスタごとに、単語の出現数の偏りを確認するため χ^2 検定を行った結果、人数分布に有意な偏りが確認された（Table 6）。下位検定の結果、他者志向の笑いにおいて、ポジティブ反復方略では、他の方略に比べ有意にクラスタ関連語の出現数が多く、ポジティブ変化方略はネガティブ反復方略に比べクラスタ関連語の出現数が有意に多かった (*ps* <.01)。一方、自己志向の笑い

において、ポジティブ変化方略では、他の方略に比べ有意にクラスタ関連語の出現数が多かった (*ps* <.01)。

楽しさ想起クラスタについて多重比較分析を行った結果、ポジティブ反復方略、ポジティブ変化方略が順に、クラスタ関連語の出現数が有意に多く、ネガティブ反復およびネガティブ変化方略の出現数は同程度であった (*ps* <.01)。しかしながら、楽しさ想起のクラスタにおいても、語り直しの目的が、楽しく良い精神状態であるために肯定的想起を欲するサブクラスタ（「嬉しい」「本当に」「思い出」「浸る」「気分」「思い出す」「楽しい」）と、否定的な記憶の積極的忘却や忘却を防ぐという意味で語りに否定的側面を持つサブクラスタ（「過去」「起きる」「嫌」「思い込む」「起こる」「言い聞かせる」「体験」「忘れる」）の相反するクラスタが存在する。そこで、サブクラスタごとに、単語の出現数の偏りを確認するため χ^2 検定を行った結果、人数分布に有意な偏りが確認された（Table 6）。下位検定の結果、肯定的目的の楽しさ想起におい

て、ポジティブ反復方略では、他の 3 方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。一方、否定的目的の楽しさ想起において、ポジティブ変化方略では、ネガティブ反復およびネガティブ変化方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。

前向き思考クラスタについて多重比較分析を行った結果、ポジティブ変化方略では、その他の方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。

感情共有クラスタについて同様の分析を行った結果、ネガティブ変化方略では、その他の方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が少なかった ($ps < .01$)。しかしながら、感情共有のクラスタには、5 つの特徴的なサブクラスタが確認された；同情や慰めを求める目的（「伝える」「自分」「相手」「他者」「同情」「慰める」）、心配の希求または心配を拒絶する目的（「褒める」「周囲」「心配」）、自己注目を動機とする目的（「幸せ」「感じる」「会話」「自慢」「思う」「目的」「知る」「経験」「励ます」）、否定的な状態からの開放を求める目的（「楽（になりたい）」「悲しい」「大丈夫」「心」）、切り替えを行うための目的（「明るい」「気持ち」「話す」「反省」「気」「見せる」「他人」「自身」）（Figure 6）。そこで、サブクラスタごとに、単語の出現数の偏りを確認するため χ^2 検定を行った結果、心配の希求・拒絶を除く全ての目的において、人数分布に有意な偏りが確認された（Table 6）。

下位検定の結果、同情を求める共有において、ポジティブ反復方略では、ネガティブ変化およびポジティブ変化に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。自己注目動機において、ポジティブ反復方略では、他の 3 方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった ($ps < .01$)。開放を求める共有において、ネガティブ反復方略は、ネガティブ変化およびポジティブ反復方略に

比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった。切り替えにおいて、ポジティブ反復およびポジティブ変化方略は、ネガティブ変化方略に比べ、有意にクラスタ関連語の出現数が多かった。

過去と現在の対比および自信は、その後の検定において有意な差が認められなかった。

考察

本研究では、4 つの語り直し方略（ネガティブ反復・ポジティブ反復・ネガティブ変化・ポジティブ変化）によって、語り直しを行う目的や、語りの社会的機能に差異が生じるかを探索的に検証した。

はじめに、方略ごとに生成された目的について、量的な差異が生じるかどうかを、ユニット数を基準に精査した。その結果、ポジティブ反復方略が最も多くの目的を有する一方で、ネガティブ変化方略の目的は最も少ないことが明らかになった。単純な量的分析であることから、ユニットごとの類似性を加味したわけではないが、この結果はポジティブな体験をポジティブに語り直すことには、多くの目的が内包されることを示唆するものである。続いて、テキストマイニングを用いた語り直し方略ごとの頻出語・特徴語の抽出、および、対応分析による質的な分析を行った。その結果、ネガティブ反復方略・ポジティブ反復方略・ポジティブ変化方略からは、それぞれ特徴的な単語が抽出され、3 つの方略に独自の目的が存在することが示唆された。しかしながら、ネガティブ変化方略では、方略に内包される特徴的な言語の抽出には至らなかった。ユニット数による量的な分析の結果を合わせて考えても、ポジティブな出来事をネガティブな感情的側面から語り直すことに、社会的機能を伴う特徴的な目的は付随されにくい可能性が推察される。

また、対応分析によって明らかとなった 3

方略の特異性を、共起ネットワーク分析の結果とあわせて考えると、方略ごとに特徴的な語り直しの目的が明らかになる。ポジティブ反復方略においては、嬉しい・盛り上げ・幸せなどの単語が特徴的に抽出されていることから、語り直しを楽しむため・しあわせ感・雰囲気作り・嬉しさ、などの共起がこれに対応すると考えられる。また、ネガティブ反復方略においては、楽（になりたい）・同情・慰めの単語が抽出されたことから、他者に自己開示すること・共感の共起ネットワークが抽出語に対応すると考えられる。ポジティブ変化方略においては、前向き・笑い話・変える、といった単語と対応する共起として、元気付け・前向きな思考の2つが考えられる。なお、ポジティブ変化方略を用いた語り直しの目的は、男性に比べ女性において特異的に作用しやすいことが対応分析より明らかになった。

つまり、日常生活において感情価の語り直しを用いる場合は、語りの目的に応じて、適切な方略が選択されると考えられる。このような差異は、自伝的記憶の機能に大きく関与すると推察される。Alea & Bluck (2003) による自伝的記憶の社会的機能の分類と、本研究の結果を対応させると、次のようにまとめることができる。

第一に、ポジティブ反復方略は、他者との親密性を発展させ維持することにおいて特に活用されているのだろう。第二に、ネガティブ反復方略は、自伝的記憶を他者と共有することで共感的機能を活性化させることに活用されていると推察される。しかしながら、ポジティブ変化方略の結果からは、自伝的記憶の社会的機能に基づく目的を捕らえることはできなかった。ポジティブ変化方略は、社会的機能を活性化させるというよりも、個々人の行動や意思決定を支えるような方向付け機能 (directive function; Pillemer, 1998, 2003) を伴う語り直しの場面において活用されるも

のと考えられる。従来、方向付け機能は、ネガティブな自伝的記憶そのものに内在されることが示唆されていた (Bluck & Glueck, 2004)。しかし、この機能は、単純にネガティブな自伝的記憶を想起するだけで生じるのではなく、ネガティブな体験をポジティブな出来事に変換する語り直しを他者と共有することで、積極的な方向付け機能の活用を行っていると考えられる。自伝的記憶の社会的機能には、単純な思考体験ではなく、他者と記憶を共有するという条件が付随することを考慮すると、ポジティブ変化方略は、自伝的記憶の社会的機能を活用することで、方向付け機能を活性化させるという二重システムとして機能している可能性がある。

この予測は、階層的クラスタ分析に基づく語り直し方略ごとのクロス集計結果からも明らかである。階層的クラスタ分析の結果は、共起ネットワークの結果と大まかに一致していた。また、そこから明らかになった、各方略の特徴は次の通りであった。

ネガティブ反復方略では、他者からの共感および否定的な状態からの開放を求める目的に関するクラスタの関連語が、他の方略に比べ有意に使用されていた。この結果は、先述の共起ネットワークによる分析結果と一貫したものであり、ネガティブ反復方略は、固定的な目的に用いられることを示唆するものである。ところが、ユニット単位による語り直しの目的の量的な分析結果において、ネガティブ反復方略では、ポジティブ変化方略と同等のユニット数が生成されていた。このことを鑑みると、我々の多くがネガティブ反復方略を用いる際は、男女問わず、他者からの共感を得ることで社会的機能を活性化させ、否定的な自己からの開放を促す手段として、日常生活の中でこの方略を頻繁に用いると推察される。

次に、ポジティブ反復方略では、他の方略に比べ最も多様な目的を有することがクラスタ

タ分析から確認された；元気付け、盛り上げ、情報共有、他者志向の笑い、肯定的目的の楽しさ想起、同情の共有、自己注目、切り替え。これらの目的の多くは、元気付けや盛り上げ、他者志向の笑いに代表されるように、自伝的記憶の社会的機能である、他者との親密性の形成・維持に役立つことは明白である。また、ユニット分析の結果からも、ポジティブ反復方略は最も多くの目的を生成していた。つまり、ポジティブ反復方略が活用される状況は、他者との有効な人間関係を形成していく上において欠かすことのできないコミュニケーション場面であり、多様な目的のもとでポジティブ反復方略が十分に活用されることは、個々の対人関係スキルと強い正の関連を持つと推察される。また、目的の一部からは、心の切り替えというように、自己の安定に関わる自己志向的な場面においてもこの語り直し方略が活用されることが確認されている。このような能力は、たとえば、逆境にあっても精神的健康を維持する能力であるレジリエンス (Luthar, Cicchetti, & Becker, 2000) との関連性も推察される。つまり、ポジティブ反復方略は、他者志向的な場面においても、自己志向的な場面においても、記憶に付随する感情的な側面をどれだけ上手く活用できるかに、目的の本質が内在すると考えられる。

続いて、ポジティブ変化方略では、前向きな志向、自己志向的な笑い、否定的な目的を伴う楽しさの想起、切り替えといった目的が、その他の方略に比べ多く活用されていることが確認された。このような目的での記憶の活用は、まさに自伝的記憶の方向付け機能に一致するものである。また、対応分析の結果からは、ポジティブ変化の語り直しが、ネガティブ反復およびポジティブ反復に比べ、自己志向的な目的に基づいて活用されることが多いと判断できる。つまり、この方略を用いた語り直しを効果的に行う場合は、ネガティブな

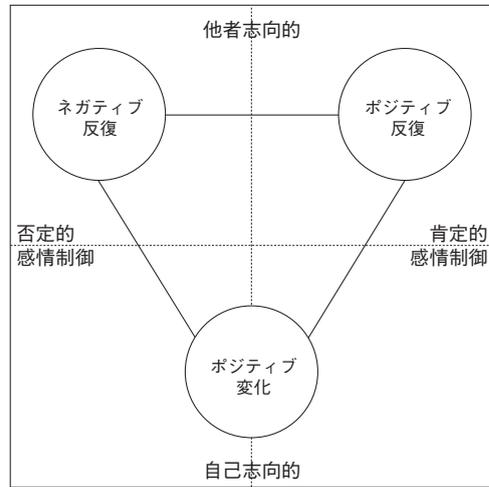


Figure 7. 語り直しの方略と語りの目的の関連性

感情価を制御可能な状況にあることが前提となる。なぜならば、感情制御がままならない体験を語り直したとしても、感情に振り回されるのみで認知的な制御に至らず、ネガティブな記憶を自分自身の未来の方向付けが可能な記憶に変化させるという目的を達成できないと推測されるからである。

なお、ネガティブ変化方略では、この分析においても、語り直しに特徴的な目的を見出すことはできなかった。

つまり、感情価を伴う転換的語り直しには、向性と感情価を軸とするトライアングル関係が形成されていると考えられる (Figure 7)。語り直しの目的が他者志向的である方略には、ネガティブ反復・ポジティブ反復の2種が存在するが、この方略を2分する軸が感情価である。ネガティブ反復方略は、ネガティブな感情を制御することを主な目的とする一方で、ポジティブ反復方略はポジティブな感情を制御することを目的とする。また、語り直しの目的が自己志向的であるポジティブ変化方略は、感情制御が主たる目的ではなく、否定的な過去を認知的に制御することに重点が置かれると推察される。このように、日常生活の中で語り直される記憶には、目的に

沿った効果的な活用の方略が存在すると考えられる。また、語り直しの方略と語りの目的が一致しない場合、不協和が生じることによって、情動や認知の側面に阻害的な効果をもたらす可能性も考えられる。

ただし、本調査は、参加者の語り直しの目的を回顧的に想起させて得られた結果である。ここで得られた結果の妥当性を検証するためには、語りの目的からどのような方略の語り直しが用いられるかを検討する必要がある。たとえば、自己志向的で認知制御を目的とした語り直しを行わせることで、ポジティブ変化方略が多く活用されるかを確認することによって、本稿の成果の妥当性が得られると考えられる。この点については、今後の研究で明らかされることが期待される。

引用文献

- Alea, N., & Bluck, S. (2003). Why are you telling me that? A conceptual model of the social function of autobiographical memory. *Memory*, 11 (2), 165-178.
- Alea, N., & Bluck, S. (2007). I'll keep you in mind: The intimacy function of autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, 21 (8), 1091-1111.
- Bluck, S., & Glueck, J. (2004). Making Things Better and Learning a Lesson: Experiencing Wisdom Across the Lifespan. *Journal of Personality*, 72 (3), 543-572.
- Bruce, D. (1989). Functional explanations of memory. In L. W. Poon, D. C. Rubin, & B. E. Wilson (Eds.), *Everyday cognition in adulthood and late life* (pp. 44-58). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Conway, M. A. (1990). *Autobiographical memory: An introduction*. Milton Keynes, England: Open University Press.
- 樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析－2つのアプローチの峻別と統合－、*理論と方法*, 19 (1), 101-115.
- 樋口耕一 (2013) KH Coder2.x リファレンスマニュアル (2013年8月5日)
- Kazuhiro Ikeda. (2009). The Effects of Perspective Switching on Retelling Stories, *Tohoku Psychologica Folia*, 68, 63-70.
- 池田和浩・仁平義明 (2009). ネガティブな体験の肯定的な語り直しによる自伝的記憶の変容、*心理学研究*, 79 (6), 481-489.
- 池田和浩・仁平義明 (2013). 2種類の感情的な転換的語り直しが中性的な物語記憶に与える影響、*尚絅学院大学紀要*, 65, 59-69.
- Luthar, S.S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000). The construct of resilience: a critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, 71 (3), 543-562.
- Marsh, E. J., & Tversky, B. (2004). Spinning the Stories of our Lives. *Applied Cognitive Psychology*, 18 (5), 491-503.
- Norrick, N. R. (1997). Twice-told tales: Collaborative narration of familiar stories. *Language in Society*, 26 (2), 199-220.
- Pasupathi, M., & Carstensen, L. L. (2003). Age and emotional experience during mutual reminiscing. *Psychology and Aging*, 18 (3), 430-442.
- Pillemer, D. B. (1998). *Momentous events, vivid memories*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 244.
- Pillemer, D. B. (2003). Directive functions of autobiographical memory: The guiding power of the specific episode. *Memory*, 11 (2), 193-202.
- Pohl, R. F., Bender, M., & Lachmann, G. (2005). Autobiographical memory and social skills of men and women. *Applied Cognitive Psychology*, 19 (6), 745-759.
- Schank, R. C. (1990). *Tell me a Story: A New Look at Real and Artificial Memory*, New York, NY, England: Charles Scribner'S Sons. xiii, 253 pp. 長尾確、長尾加寿恵 (訳) (1996) 人はなぜ話すのか 白揚社
- Thorne, A., McLean, K. C., & Lawrence, A. M. (2004). When Remembering Is Not Enough: Reflecting on Self-Defining Memories in Late Adolescence. *Journal of Personality*, 72 (3), 513-541.
- Tversky, B., & Marsh, E. J. (2000). Biased retellings of events yield biased memories. *Cognitive Psychology*, 40 (1), 1-38.